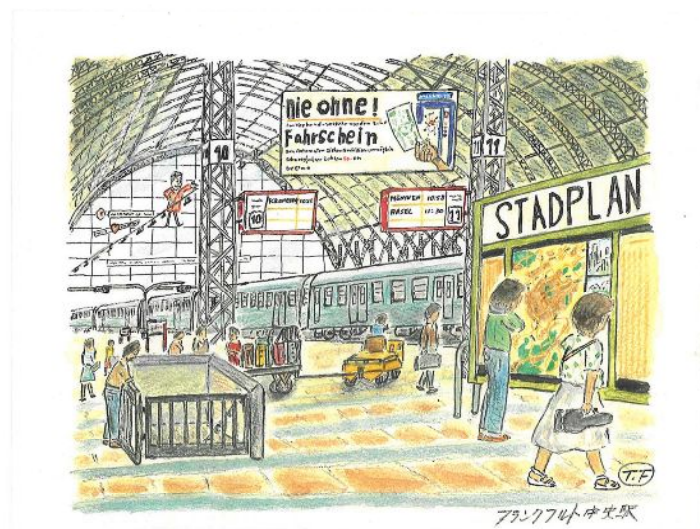


# 西欧・東欧見聞録

(ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行)



## 西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

### プロローグ（旅のはじまり、西ドイツ、オーストリア）

1989年は、今にして思えば20世紀史上重要な年、いわば激動の年であった。

このような時に冷戦終結を前にしたヨーロッパを旅することができたことは非常に有意義なことであった。1989年4月、中国では胡耀邦総書記が失意のうちに死亡。彼の死を悼む学生や一般市民は北京の天安門広場に集結、彼の名誉回復を要求。彼らが実際求めたのは、中国の民主化であった。5月には約1000名の学生が天安門でハンストに入った。6月4日未明、軍がデモ隊に無差別発砲を開始、天安門広場は血に染まった。いわゆる天安門事件である。

この騒動のようやく治まりかけた7月3日、成田をあとにした。ソ連国営エアロフロートSU578便。モスクワ経由フランクフルト行きである。ブダペストまで同行する本間とともに、初めての海外旅行ということでいささか興奮気味であった。成田は雨。客は日本人旅行者とロシア人、ロシア人は一般人が旅行するなど無理なご時世であったから、整った身なりからしても駐日大使館員かまたKGBの人間なのだろうと憶測を働かした。スチュワーデスはいかにもスラブという感じの小太りのおばさんで、最初からサービスの良さなど期待してなかったから良かったが、共産圏にありがちなノルマだけこなせば良いという姿勢がありありであった。

定刻に成田を出発。機内には、宇宙人の文字のようなキリル文字の表示。通常の海外旅行とは異なり、華やかさというよりいささか緊張の出発であった。機内は、はっきり言って狭い、片側3列で中央通路一本のみ。日本を出てしばらくは雲海の上を飛行、どこを飛んでいるのか全く見当がつかなかった。暇だったので、6カ国会話のガイドで予習をした。特に、フランクフルトに着いてからは可能なかぎり現地語を話そうと決めていたから、ドイツ語の空港編を開いて税関の通り方からはじまってホテルのチェックインまで。4時間ぐらい経っただろうか、眼下に緑の大地と川の流れが見えた。シベリア上空か。2回目の機内食が配られる。機内食は、いくらソ連でも国際線のためか、まともだ。黒パンのようなものが出たが、これがライ麦パンであろうか。酸っぱいような味がしてあまりおいしくはなかった。ソ連にもファンタという飲み物があり、キリル文字でそれらしく日本と同じようなパッケージで書いてあったのには驚いた。機内食に、キャビアもつくと事前に聞いていた。フランクフルトまでトランジットを含めて14時間。この間に5回も機内食が出た。やがて飛行機は再び雲海の中に、機体がかなり揺れ始める。そうこうしているうちにロシア語のアナウンスがあり、時間的にいってモスクワ到着と思われた。

長いロシア語のあとたった一言日本語で”まもなくモスクワ、シュレメチボ第2空港に到着します。”とあった。冷たい雨の中、着陸した。エアロフロートの国際線のパイロットはソ連空軍上がりと聞いていたが、さすがにショックも少なく上手な着陸であった。

空港ビルに入って驚いた。私は今まで、日本以外知らなかったもので、日本のことが当たり前のような感覚になっていたが、この暗さは何なんだ。音楽もなにもない空間。照明は必要最低限に

も満たない。これが国家を代表する首都の国際空港かと思うと信じられない。成田空港が停電になり、非常電源だけで照明を行ったらこんな具合なのだろうと思われる。空港のレストランを覗いてみたら、これまた暗い。よく目をこらしてみると、ろうそくの明かりの中には結構人がいるではないか。しかし、みな無口で黙々と食べているようだった。ビル内を一回りすると、異様にその区画だけ明るい部分があり、見ると日本食のレストランであった。実際のところは、レストランといえるようなしろものでないことはすぐに判明した。”いらっしやいませ”とたどたどしい日本語で迎えてくれたのは、モンゴル系か朝鮮系のロシア人であった。店内には、富士山の絵（銭湯で見るとほぼ同様）、和傘がひろげておいてある。

メニューを見ると、内容の貧弱さといったらない。レストランのメニューに焼きおにぎりである。とりあえず、日本円換算 300 円のコーヒーと 1300 円相当の焼きおにぎりを頼んだ。すぐに、がっかりした。缶コーヒーといかにもレンジでチーンのおにぎりが出てきたのである。まあそれでも本日 5 食目でもあり、とりあえずよしとするかと、あきらめの気持ちで食した後、再び空港を探索した。行き先にはウランバートル、ピョンヤンなどがあり東側の国にいることを実感する。止まっている飛行機には、ハンゲル文字と北朝鮮の国旗が描かれ、ここだからこそみれる光景だと、異国の中にいる自分を改めて感じ入った。空港ロビーでは銃を持った若い兵士が警備にあたっていたので英語で”私たちのフランクフルト行きは何時に乗り込めるのか？”と聞いてみたが、英語で”一時”と、現在の時間を答えてくれた。結局、わからないので、チェックインカウンターの長い列に混じって待っていた。

やがて、フランクフルト行きのチェックインの表示があり飛行機に乗り込むと、ここでまた、機内の情景が一変しているのに驚いた。乗ってきたのは皆、背が高く大木のような人ばかり。これが、ゲルマン民族なのだ。これから、いろいろな国をまわってみると、ゲルマン系の北方の人々は概して体が大きく、ラテン系の南方系の人々は体が小さく日本人はどちらかというラテン系の小さな体であることがわかる。モスクワまでとは違って、非常に窮屈な感じをしながら窓の外を眺める。

いま、どのあたりを飛んでいるのであろうか。ウクライナ？ポーランド？と思いをはせながら、6 食目の Diner にうんざりしていると、再び機体が揺れだした。と、近くのドイツ人が”フランクフルト、フランクフルト”と叫びだした。窓の外を見ると、確かにいかにもドイツといった感じの町並みが見える。機体は徐々に下がりだし、着陸。果たして、私は、初のヨーロッパへの第一歩を記したのであった。

空港ターミナルへはバスで移動。紺色の尾翼に翼のマークのルフトハンザ機が並ぶ。ついに、リングフォンの第 1 章で出てきたフランクフルト国際空港”ライン・マイン・フルーグハーフェン・フランクフルト”にきたのである。ここで、テキスト通りの反応を期待して税関が“ハーベン・ジー・エトバス・ツー・フェルツォレン？申告するものはありますか？”と聞いてくるものと思っていたら。私の赤いパスポートを遠くから見ただけで開きもせず、にこっと笑って通してくれたのには、はっきり言って拍子抜けした。どちらかという儀式のような入国審査があった方が実感があるのにと贅沢なことを思いながら、いとも簡単に西ドイツに入国してしまったの

である。

しかし、さすがに経済大国西ドイツの空港だけあって明るくきれいだ。もっとも、空はまだ明るいけれども、時間はかなり遅く、店は開いていなかった。とにかく、フランクフルト市内に向かおうということになり S バーンの表示に向かって歩く。

S バーンの駅の表示は片方がフランクフルトで片方がマインツとなっており丁度、ドイツ国鉄 DB (Deutsches Bundesbahn) の本線の沿線上に空港があることが想像できる。夕闇迫る中、私たちを乗せた S バーンは約 20 分ほどでフランクフルト中央駅についた。今回の旅行は、気ままな旅の予定なので宿泊地も大まかにしか決めてなかったが、さすがに最初の日のホテルだけは予約しておいた。しかも、フランクフルトは特に駅前是非常に治安が悪いと聞いていたので、最初の日から宿探しで路頭に迷うのだけはさけたかった。本日のホテルは駅のすぐ近くのエクセルシオールで上等なホテルであった。チェックインは英語で行ったが、さすがに緊張した。

部屋に入ると、安心したのか人通りもいっぱいあったし大丈夫だろうと、駅に買い物に行った。駅のキオスクでビールを買った。たぶん、フランクフルトの地酒であるヘンニンガーだったと思う。ビールを飲んで心地よい酔いに任せながら、いよいよフランクフルトに来たのだと、感慨に耽った。外を見ると、さすがにドイツ経済の中心都市だけあって高層ビルも見える。ただ、駅前のビルに韓国企業の看板もあり日本に負けず韓国経済も上昇中であることを実感できる。今日は 14 時間も飛行機に乗り、朝も 4 時に出発したのにあまり疲れていない。やはり、初めての海外旅行で興奮しているのであろう。また、西回りはどんどん自分の体内時計よりも時間が遅れてくる勘定なので時差ボケがないのかもしれない。

翌日は、曇り時々晴れ。ホテルをチェックアウトしてまず最初に行くことは、本日の宿を確保すること。贅沢は最初だけということにし、ユースホステルに泊まることにした。市電に乗り、メイン川の対岸ザクセンハウゼンのユースホステルに行き宿泊の手続きをとった。ユースホステルだとさすがに安い、大部屋の二段ベットだ。これからずっと、街に着いたらまずは宿探しの生活が始まるのだ。大きな荷物を預け、シュタットプラン（地図）をもらって街に出た。これからずっと、ユースホステルや駅のインフォメーションでもらう地図がかなり重宝することになる。

再び駅に戻り、まず金を両替しようとしていたらドイツ人の若者が近寄ってきた。両替屋を案内してくれるらしい。しかし、まだ、ドイツに来たばかりで当初彼を信用しなかった。我々の会話でそれがわかるらしい。いいから黙ってついてこいという感じで、われわれも仕方なしについていくときちんとした両替につれていって来て、疑ってかかって大変に申し訳なかった。中心街ハウプトバッヘへ地下鉄 U-bahn で向かった。まずはとりあえず観光とばかり、ゲーテの家に行ったが、ドイツ文学にさほど造詣の深くない私はすぐに飽きてしまった。しばらくわかれて自由行動とした。私にとっては、ドイツ金融の中心フランクフルトの町並みの散策のほうが良い。とりあえず自宅にはがきを出そうと絵はがきを買い求め、軽くしたためて郵便局を探した。このあたりから、かつて一生懸命リンガフォンでドイツ語を勉強したことが役に立ちだした。“エントシュルディグング。ギプト・エス・アイネ・ポストムト・イン・デア・ネーア？この近

くに郵便局はありますか？”と自然に出てくる。これから、このかた、ドイツに限らず”何々が近くにありますか？”や”なにになにしたい”や”ありがとう”などがきわめて有用であることがわかることになる。再び本間と待ち合わせの場所で会って、デパートのレストランで昼飯を食べた。（結局はお上りさんである。）ここでつかってみたのはチップを渡すときのことばで、“シュティムト・ショー！つりはいらぬからとっておいてくれ”英語でいうところの”Keep the change!”である。この言葉は”ダス・イスト・トリンクゲルト”と書いて渡すよりかっこいいと書いてある。

（下：フランクフルト中央駅前にて）



食後は、夜は危険で歩かない方がよいといわれるメインストリートのカイザー通りを散策。途中写真屋でフィルムを買ったが、富士カラーの製品の多いこと、特に”写るんです”は大ヒットらしくこれからどの国に行っても（共産圏にはなかったが）目にするようになる。しかし、ひねくれ者の私は、せつかくドイツにいるのだからとアグファカラーのフィルムを買った。買ってみて驚いたのは、フィルム代に現像料も含まれていることであった。また、このごろ咳が出だしてひどかったので薬局（アポテーケ）に行って咳止めを買った。“イッヒ・ハーベ・フィーレ・フステン。”（咳がひどい）と言ったら咳止めを買うことができた。フランクフルト中央駅の公衆便所に入ったら、ここでまた不思議な光景を目にする。便所はきれいなのだがどれもこれも便座がない。後日、これは、誰かが家で使うために持って行ってしまったのだと聞いて驚いた。真偽のほどはわからない。

一通りフランクフルトを散策した後、メイン川の畔の公園で一息入れる。メイン川はライン河の支流だが、貨物運搬船が盛んに通り大陸の内陸部では水運もかなりの比重を持っていることが



(上：メイン川とフランクフルト中心街、下：メイン川のほとりで)

実感される。フランクフルトは正式には **Frankfurt Am Mein** (メイン川沿いのフランクフルト) という。メイン川の水運で現在の富を築きあげたのであろう。東ドイツのポーランド国境近くにはオーデル・ナイス線で有名なオーデル川の名を冠した街 **Frankufur An der Oder** (オー

デル川沿いのフランクフルト)という街がある。気がついたことだがドイツの民家の窓辺には皆、きれいな花が飾ってあって美しい。あれは、ゼラニウムで虫除けでもあり実用性と美観にと役に立っている。

ユースホステルの近くを散策、フランクフルト南駅近くの公園では夜 9 時にもなるのにまだ空は明るく、子供連れの家族が遊んでいた。緯度が高いだけあって、夏は日本とは比較にならない位、日没が遅いのだ。いったん、ユースホステルに戻って、ザクセンハウゼンに繰り出した。ジャーマンソーセージをたらふく食べ、ビール、ワインと気持ちの良い夕べであった。思えば、最初の訪問地をドイツにしたのは大正解であった。街はきれい、治安も聞くほど悪くない。ほとんど日本にいるのと同じように過ごすことができる。さて、あすからはロマンチック街道にそって南下することになる。宝石のような街ローテンプルクを見ておきたい。

今日はまずロマンチック街道の始点ヴュルツブルグまで行って街を見た後、さらにローテンプルクに足を延ばして宿を取ることにした。予定のインターシテイの発車まで時間があるので、フランクフルト内の市電を乗り歩いた。フランクフルトの市電は白とオレンジのツートンカラーだ。停留所にはフランケンシュタイン広場(フランケンシュターナープラッツ)などおもしろいものもある。

フランクフルト中央駅でヴュルツブルグまで切符を買ったが、果たしてドイツ語で用が足りた。語学というのは、少しずつ言葉を使ってみて、実際使えることがわかると、そのあと自信をもって使うことができる。これの積み重ねなのだとしみじみ感じた。インターシテイで 1 時間半。ユーレイルパスの一等パスを持っていたが、今使うのはもったいないので 2 等にした。同行の本間には申し訳ないが、2 等も飾らぬ雰囲気があって、我々のようなバックパッカーにはピタシだと思う。

ヨーロッパの鉄道は改札がないので、車掌が検札にくる。無賃乗車も可能なのではないかと思うが無理だそうである。

ヴュルツブルグにつくとまず黄色い市電に乗りマルクト広場に向かった。露天のレストランで昼飯にした。3 人連れの地元のおばさんたちと相席になり、しばし、話が弾んだ。しかし、昼間からビールを飲んでの食事とは気持ちの良いものである。食事の後は自由行動とし駅で落ち合うこととした。ここは、8 世紀以来の古都ということでレジデント宮殿など見所も多いが、私はどちらかというと町並みの散策の方に興味が有るので通りを歩くこと(シュタットブンメル)にした。ドイツの街は大体カイザー通りがあって(大体これがメインストリートで)、中心街にマルクト広場が有ることがわかった。(スペインではマヨール広場である。)ひととおりの散策して帰りは黄色い市電には乗らずに駅まで歩いた。

駅の本屋を覗くと、いいものを見つけた。ポケット版の独英・英独辞典である、大きさが 7 cm x 4 cm で日本円にして 800 円程度。このシリーズには今回の旅行中、大いに助けられた。この辞書を購入することにより言葉が飛躍的に増えたのである。スペインでは同じシリーズの西英・英西辞典(同じく黄色に青のラベルでメーカー名はランゲンシャイド)、フランスではメー

カーは別だが仏英・英仏辞典を購入し非常に重宝した。

(下：地元のおばさんたちと)



ヴュルツブルグからローテンブルグまではローカル列車に乗って約1時間程度。

列車の窓の外はいかにもドイツの町並み、整備された町並み。家々はどれも手入れが行き届いてきれい。窓には花。町々の間には緩やかな起伏の畑。想像していた通りのドイツの光景であった。

いつしか雨が降り出し、ローテンブルグにつく頃には大雨となった。駅の有るところは中心街から離れているらしく寂しい。駅で、今晚の宿を確保し、その後はどうしたものかと思案に暮れた。傘もない、駅前にタクシーもない。ええい電話でタクシーを呼んでみるか。駅員にタクシー会社の電話番号(テレフォヌマー)を聞いて公衆電話のダイヤルを緊張しながら回す。”いま駅にいる。2人の日本人だ。ペンション・・・までお願いしたい。”とドイツ語で伝え、待つこと5分。果たしてベンツのタクシーがやってきた。この一件でドイツ語会話にまた自信がついたことはいままでもない。

ドイツのタクシーに乗って気がついたことだが、ドイツでは大体タクシーといえばベンツである。ドイツの国産車なのだから当たり前かもしれないが、日本では高級車として通っているだけになぜか不思議な気がした。また、客は助手席から乗せることもわかった。

宿に着き部屋に落ち着いた頃には雨もやんだ。本間がブッペンテアターという人形劇を見たいとのことだったのでそれに行った。坂道を上り小さな劇場に。結構人が入っている。劇はやはりドイツ語なのだがさすがに聞き取れない。時々ジョークを入れるらしく周りが大笑いするのだが我々2人は取り残されたように黙っていることしばしであった。

劇のあと近くの小さなレストランで夕食をとりその日は早めに休んだ。

翌日は気持ちの良い天気だった。さわやかな朝で睡眠も十分にとり、さらに晴れのすばらしい



朝、朝食もおいしい。パンはコンチネンタルブレクファストであり、ブロートヒエン（イギリスだと食パンになるようだ）。本間は先に起きて、市庁舎のあたりを散歩して来たらしい。食事のあとゆっくり出発。まず、中世犯罪博物館を見た。魔女の椅子、恥辱の面など中世に犯罪者や魔女狩りの犠牲者がやられたであろうおぞましい展示品を見学した。ここでは、ローテンブルグ市への立ち寄り証明書（日本語で”日出ずる国より来る・・・”と書いてある）をくれた。

きれいな町並みの通りを散策、しっかりとマクドナルドは存在し、昼飯はここで食べた。自宅に絵はがきをしたためる。旅行中、まめにはがきを出すのは、親に心配をかけなくて済むという利点の他に、帰った後にそれを見ると非常に懐かしい思いがすることが帰国後わかった。

有名な Ratstrinkstube（30年戦争の際に、市民を守るために敵の差し出した大量の酒を飲み干して街を救ったマイスタートルンクと愛称される市長の仕掛け時計で有名だがそれは見なかった。）を見た。本日は天気も良いので駅まで歩く。本日は、ミュンヘンまで行く予定だがせっかくだからロマンチック街道の一部くらいは、ローカルバスで動いてみたい。駅前でバスを待つ少女に”ミュンヘンに行きたいけれど”と聞いてみたところ、ドンビュールまでバスで行って列車に乗って行けばよいと教えてくれた。近くのフォイヒトバンゲンという街に済んでいるとのこと。住所を教えてくれたので、帰国後手紙を出したらびっくりしてくれてその後、3年間文通があった。彼女はお菓子作りのマイスターを目指すとのことで、ニュルンベルグに引っ越し、私も研修医となり忙しくなった時に、途絶えてしまったが、クリスマスには自作のレープクーヘンを送ってきてくれたりと、もっと根気よく文通を続ければよかったと今にして思う。



（ドンビュールの駅で Katja と記念写真）

ドイツのバスは路線バスもベンツで非常にきれいである。裕福な国なのだという思いが

ますます強まる。バスの中はローテンブルグの学校から自宅に帰ると思われる小学生くらいの子供でいっぱい。うるさい。牧歌的な、緑の平原の風景の中をバスはゆっくり走る。途中アウトバーンを横切った。しばらく走ってドンビュールの駅に着いた。ここで先ほどの、少女カトーヤも降りた。写真を撮らせてもらってアウフビーダーセーエン。駅でミュンヘンまでの片道切符を買う。もう、なれたものだ。ローカル線で、アンスバッハまで行き、乗り換えである。ハノーバー発ミュンヘン行きの急行列車がやってきた。ヨーロッパの鉄道は、駅でも放送のあるところは少なく、ましてや発車ベルなどまず無い。ひっそりとやってきてひっそりと発車する。何となく不気味なのは、やかましい日本の駅の光景になれてしまったからか。

婆さんが一人で乗っているコンパートメントに入る。婆さんは、エッセンの近くのブッパータルという街から来たらしい。盛んに、モノレールの説明をしているようだが良くわからなかった。何となく、街の中は、路面電車ではなくモノレールが走っているようだが。しかし、これも、後日といっても約 8 年後だが、子供を連れて上野動物園に行つてモノレールに乗った時に婆さんのいっていたことがわかった。そこには、モノレールの発祥の地、ドイツのブッパータル市のモノレールを模して作られたものを書いてあった。ドイツでは、列車一つ一つ（もっとも急行以上だが）には、それぞれの列車の時刻表が座席においてあり途中停車駅の情報も書いてあり、自由に持ち帰れるようになっている。西ドイツの列車は一等がベージュに赤、2 等がベージュに青でそれぞれ車体の横に D B (Deutsches Bundesbahn: ドイツ連邦鉄道) の略字が書いてある。東ドイツの列車は総じて緑とベージュでこちらは D R (Deutsches Reichsbahn: ドイツ帝国鉄道) と書いてあったが、なぜ共産主義国家なのに帝国なのかわからなかった。

婆さんとひとしきり会話を楽しむ。窓の外は、広大な麦畑。一瞬、ビキニ姿で、畑作業をしている若い女の人の姿が見えて、一瞬我が目を疑った。南ドイツの明るい日差しの中、そんなことがあってもおかしくは無いなど自分を納得させながら窓の外を眺める。

我々は、すぐにミュンヘンにになってしまうのはもったいないのでアウグスブルグに立ち寄ることにした。古代ローマ帝国のアウグスツス帝にその名が由来し、この町の歴史もその時代；紀元前 15 年までさかのぼることのできる、ドイツでの最古の街らしい。駅に荷物を預けて、市内散策。ルートビッヒ広場、アウグスツスの噴水、フッゲライ（1 年間の家賃が 1.75 ドイツマルク約 140 円の団地）などを見た。ここでは、美人の日本人がインフォメーションにいと聞いていたが、その人はいなかった。

アウグスブルグからさらに鉄道でミュンヘンへ。バイエルン州の州都、ドイツ有数の大都市である。中央駅もさすがに大きい。まずインフォメーションに行つて、ミュンヘンの街の地図をもらいユースホステルの場所を聞いた。ヨーロッパでは i のマークのインフォメーションが充実していて、ことに自由旅行の際には非常にありがたい。また、各都市への時刻表（まさに小さな 1 枚の紙で、時刻表である。）が、主要都市ごとにおいてあり次の訪問予定地ウイーンのものももらっておく。地下鉄でユースホステルに向かい、2 日分の手続きをする。

荷を降ろすと早速、街に出て夕飯にした。ミュンヘンはオリンピックの開催地でもあり、ドイ

ツ有数の大都市である。良く、バイエルン州はその経済的や政治的実力からアメリカにおけるカリフォルニア州にたとえられ、ミュンヘン市自体は日本においては東京に対する大阪のようなものとされる。また、ヒトラーの演説でも有名な都市である。飲み屋があったのでふらっと立ち寄ると、ひげの大男が3人で酒を飲んでいて。一瞬、しまったなと思ったが、3人のほうから招き入れてくれた。バイエルン州の男とオーストリアから来ている男であり、結構いろいろ楽しく話をした。ビールはやはり地酒のレーベンブロイである。ゲルマン系の人のおおきを痛感した。さらに、立派なひげを生やしているので物語に出てくる木こりのイメージである。ほろ酔い加減で店をでてユースホテルに向かう。ミュンヘンはオクトーバーフェストという一般的にはビール祭りが世界的に有名で、10月のその時期になると世界中から観光客が集まるとのこと。さきに出てきたカトーヤも、家族でビール祭りに行ったとの手紙をくれたことがあり、にぎやかさを伝えてきてくれたことがある。



(左：列車のチケット、右：Katja からの手紙)

翌日は朝飯を食べていると、別の日本人の若者が相席を求めてきた。彼も、個人旅行でいろいろと楽しい話を聞かせてくれた。オランダはあまり対日感情が良くないこと、イタリアの食事は非常に美味しい、ことにパスタが美味しいことを力説していた。また、英語ができないとタクシーなどでは、なめられてられることもあることなどを話してくれた。

今日は1日自由行動とした。私は、とにかく市内の散策をすることにした。まずは、ニュンヘンブルグ城が近くにあることがわかったのでそこまで歩いて広い場内の庭園を散策した。歩き

ながら、長年の夢であったヨーロッパの地を自分の足で歩いていることの感慨にふけた。それから、青い市電に乗ってあちこち歩いてみた。本日は他にも用事があり、まず、ベルリンまでのチケットを手に入れること、それと今までとった写真がきちんと現像されているのを確かめること。まず、これらの用事を片づけようか。中央駅に戻り、立ち食いのハンバーガーを食べる。やたら立ち食いのスタンドがあるが、ヨーロッパ殊にドイツでは立ち食いが一般的なようだ。広大で近代的なミュンヘン中央駅をひとしきり見た後、格安チケットを売っているというトランスアルピーノのオフィスを探す。ガイドブックではシュバントハーラー通りというところのようだ、自転車に乗っている若い娘に場所を聞いた。(下：ミュンヘン市内の市電)



今の時期のヨーロッパはバックパッカーや、ツーリングの若者が多いせいか、スパッツをはいた活動的な女の子が目につく。トランストランスアルピーノで、ウィーン、ブダペスト、プラハ経由での西ベルリンまでの二等片道切符を買おうとしたが、当方の英語が不十分でなかなか理解させることができなかつたようで、仕方なくオーストリアのウィーンまでの切符を買った。近くに写真屋があったのでいままでとったフィルムを現像してもらおう。カトーヤと一緒にとった写真がきちんとできているかが心配だったのだ。出来上がりはロールのままにするかそれとも数コマずつ切るか(シュナイデン?)と聞かれ、Ja (ヤー：はい) と答える。出来上がりは一時間後(1Stunden)といわれ、その辺を散策した後とりにいった。心配することなく、きちんととれていた。日本では、6コマで1本だが、ドイツでは4コマで1本だった。これはのちに気づいたが、マドリッドでもパリでもそうだったのでヨーロッパ標準なのだ。

とりあえず用が足りたので、市電であちこち移動した。有名なカールスプラッツなどをめぐりドイツ博物館に行ったら、もうすでに閉館の時間であった。西ヨーロッパは緯度が高いので、夏

は日没がかなり遅い。10時でもまだ明るいくらいだ。

仕方なく駅に向かう市電に乗っていると、客は私と、後方にパンクぼい格好をした女が3人乗っていた。こいつらが、どうやら私の噂をしているらしく、生意気そうな口調のドイツ語が聞こえてくる。仕舞いには“ヤパナー・ハーベン・フィーレ・ゲルト。”日本人は一杯金を持っているぞ”という声まで聞こえてきた。これはちょっとやばいなと感じ、駅の近くの停留所で降りて人混みの中に紛れた。中央駅まで行って、そこからユースホテルまでまた市電か地下鉄なのだが、なんか今の一件でこれらに乗る気も無くなり、タクシーでどのくらいかかるか停車中のタクシーに聞いてみた。日本円で約1500円位なので、これを利用することにした。車はやはりベンツで、やはり助手席にのせてくれた。ユースホテルに着くとなぜかほっとした。今日はゆっくり休んで、明日は国境を越えてオーストリアである。

今日はいよいよ国境をこえてオーストリアである。オーストリアはドイツ語で、エオストライヒ（東方の国という意味）であり、似たような名前のオーストラリアが全く別物であることがわかる。巨大なミュンヘン中央駅、ブダペスト行きのオリエントエクスプレスという名の列車に乗る。以前アガサクリスティの小説でも有名だったオリエント急行とは異なり（これは現在VSOE: Venice-Shimpron-Orient Expressとしてロンドン、ベニス間で運行されているはずである。）ただの、国際急行列車であった。車両も東欧圏のものと思われる物が多かった。（下：ミュンヘン中央駅にて）





(オーストリア国境付近の車窓)

ミュンヘン市街を抜けると徐々に高地に向かって進み出した。牧草地が増え、のどかな、牛が草をはむ様な風景が多くなった。何の前触れもなくオーストリアの国境を越えた。入国管理官が切符とパスポートをみるだけで入国手続き終わり。西ヨーロッパはほとんど一体なのだと言うことを感じる。しかし、この open さは東欧圏に入ったとたんに一転するのだが。

相席の人はフランス人だった。フランス語で会話を試みたがあまり通じなくて、話が続かないのでやめた。若干気詰まりな雰囲気です。車窓を眺める。ザルツブルグ着。モーツアルトの生誕地として、そして音楽祭で有名な町だが今回は通過する。相席のフランス人も下車する。ザルツブルグを出ると本当にのどかな田園風景(とは言っても田んぼは無いが)の中を、列車は東へと走る。リンツをすぎる。西ドイツと異なりオーストリアの風景はのどかである。車窓左側には、時々ドナウ川が見え隠れする。まだ、大河の趣は無い。やがて列車はウィーンに近づくが、大都市に到着するという感じではない。ミュンヘンに到着するときのようなうきうきする感じが無いまま、物足りない感じのままでウィーン西駅に到着した。

ウィーンは音楽と芸術の都としても有名だが、東西両陣営の接点として国際的には非常に重要な都市であり、国連の施設もある。また、スパイが暗躍する町としても有名である。駅で両替。マルク(当時 75 円相当)からシリング(約 12 円)へ変わる。ウィーンでの宿は、出発の前に先輩からヒュッテルドルフのユースホステルがいいと聞かされていたので最初からそこに決めてあった。Sバーンに乗りさらに地下鉄 U4 に降り変える。途中シェーンブルン宮殿のそばを通り終点のヒュッテルドルフへ。

地下鉄はとてもきれいだ。乗っている人も非常に上品だ。さすがウィーンだと思った。

駅を出て、ユースホステルの場所を聞きながら歩く。非常にのどかだ。大都市のなかの地下鉄の終点の駅周辺とは思われない。小高い丘の上に、これまたきれいなユースホステルがあった。坂道の途中で、一人旅をしている西ドイツの女の子と一緒に話が弾んだ。彼女は一人でブダペストに行くとのこと。東欧圏の中でもハンガリーは比較的開放政策をとっており、旅行がしやすいとなっている。ドナウの真珠と言われる、ブダペストはやはり誰もが見たいと思っているものだ。



(各都市の市電などのチケット)

ユースホステルでどうせ空いていないだろうと思いつつ、ツインルームはあるかと聞いてみたら何と Ja(Yes)!2泊することにした。荷を降ろし、地下鉄で町に出る。3日間の地下鉄・市電のフリーパスを買う。乗り換えの駅で、新聞売りの浅黒い男たちを見かけたが、これはルーマニア人とのことであちこちの駅で見かけることになる。東西の接点としてのこの町の位置づけを実感する。地図で見てもウィーンはかなり東に位置し、プラハよりもずっと東にある。オーストリアとチェコスロバキアとの国境は 50km ならず、かつてはブラチスラバ（現スロバキア共和国の首都）とのあいだには通勤電車も走っていたと聞く。赤と白のかわいい市電に乗り、市内を巡る。有名な国立オペラ劇場、また、オットー・ワグナーの作品であるカールスプラッツ(Karlsplatz)の地下鉄駅など、いかにもウィーン的である。国際河川たるドナウ川を見たくなり地下鉄で船着き場に行ってみる。ここまで来るとさすがに広い。貨物船も通っている。さらにブダペスト行の船も見える。面目躍如である。ドナウ川の右岸には国連の建物も見える。帰りも地下鉄で。ウィーンの地下鉄駅ではエスカレーターには”ビッテ・レヒト・シュテーエン”（右に立って下さい）と表示してある。つまり、左側は急ぐ人のために開けておくということで、このシス

テムや、人がステップに載って初めて動き出すエスカレーターなど、便利さや省エネのための工夫がヨーロッパの西側先進国では多数見られたが、このとき日本ではまだこのようなことはなくエスカレーターは乗ったら、人がいっぱいでは動きが取れないというのが実情であった。ヒュッテルドルフのユースホテルに戻る。そばに教会がありシスター達を通る。とても小奇麗で、静かで素晴らしいユースホテルである。ヨーロッパで利用したものの中で最上級であった。ゆっくりと旅の疲れをとることができた。

ウィーン 2 日目、晴れ、終日個人行動とする。私は再び、ドナウ川がみたくなり地下鉄を乗り継ぎ船着き場にやって来た。ドナウの河岸を散策する。ゆうゆうたる流れで、私は、ヨハンシユトラウスの” 美しき青きドナウ ” を口ずさみたくなった。

船着き場のレストランに行ってみると、オーストリアの国旗を掲げて何かのセレモニーをしていた。生バンドの演奏があり、市長の様な偉そうな人が挨拶していたが聞いているのは、私とほかの 2,3 人の老人のみであった。ウエイトレスの人がいかにもウィーン美人といった感じの人だったので、写真を撮らせてくれないかと頼んだら簡単にとらせてくれた。



(レストランのウエイトレス)

近くには第三の男で有名な、プラターの観覧車も見える。そこから、地下鉄やらを乗り継いでベルベデーレ宮殿に向かう。途中、ドナウ運河を通るときなど、かつての強大なオーストリアをしのばせる町の光景であった。

ベルベデーレ宮殿では、上宮 **Oberes Belvedere** からのウィーンの景色はぜひ見ておくべきだと書いてあったので期待していったが、これはいささか期待外れであった。夕暮れどきだとよかったのかもしれない。そこから市電で下って、聖シュテファン大寺院に行った。地下のカタコムベにも行って見た。オーストリア歴代皇帝達の内蔵が保存されているという白い壺があり、白骨が山積みされていた。近くの美術館では東山魁偉の作品展が催されていたので、懐かしくて見に



行った。その美術館の食堂で昼食にした。昼食後はシューンブルン宮殿に行って、広大な敷地内を散策した。これだけでも結構疲れて、本日はもうユースホテルに戻って休んだ。



(オットー・ワグナー作、カールスプラッツ駅)

その翌日は、まずドナウ川クルーズの旅行社に行ってブダペスト行の船の案内をもらう。ついでケルントナー通り(Karntnerstrasse)というウィーンで一番繁華だといわれる通りを散策する。昼飯は、この通りのカフェテラスで。美術史博物館に行ってグスタフクリムトの作品を鑑賞した後、ホーフブルグ宮殿(ハプスブルク家の王宮)の周りを散策。ここウィーンはRing(リンク)といわれる環状道路に沿って、オペラ座、王宮、国会議事堂などがあるので、ここを走る市電に乗って見て回った。

ウィーンの最終日、この日は曇り時々雨。本日の第一番の仕事は、ハンガリー大使館に行ってハンガリービザを発給してもらうこと。通常料金240AS(オーストリアシリング)に320AS上乗せして、エクスプレスサービスで1時間ほどで発給してもらう。いよいよ東欧への出発である。マジャール語の文面が、旅情をそそる。

次いでウィーン西駅に行って、ブダペストまでの2等片道切符を手に入れる。ブダペスト行列車の発車が午後なので、西駅周辺を散策する。今まで旅行してきたところでも地球の歩き方を手にした旅行者を多数見かけたが、さらにハンゲル文字の地球の歩き方も存在することがわかった。つまり、韓国の若者も同じような旅行をしているのだ。駅近くの郵便局で実家に絵はがきを出した。いよいよ共産圏に入ると。

これは帰国してから感じたのだが、自分が出した絵はがきはるばる海を越えて日本に着いているのを見るとその時のことが思い出されるし、出された方もうれしいし特に両親にはまめに

してやると安心してくれるし、よいのではなかろうか。

窓口の女性に” ヴィフィール・コステン・ナッハ・ヤーパン・ミット・ルフトポスト?” 日本まで航空便でいくら?と聞くと” フュンフ・ウント・フュンフティヒ” との答え、そのまま略すと 55AS で約 700 円近くになる。あまりに高いのでびっくりして聞き返す。”

“エントシュルディグング。5.5AS。” 英語的に” 失礼しました。5 シリング 50 ギルダースです。” と言い換えてくれた。笑顔であやまってくれて、しかもいかにもウイーン美人といった感じの若い女性で、非常に感じが良かった。 (下：雨のウイーン市街)



午前中には雨であったが、午後には徐々に天気が回復し、出発のころにはすっかり晴れ上がった。これからブダペストに向かう列車は、先日ミュンヘンから乗車したのと同様、ブカレスト行のオリエント急行である。6人乗りコンパートメントに陣取る。しばらくすると、バルセロナから来たというエバと恋人のアレックス。さらにしばらくして、ニューヨーカーのリサと恋人のメキシコ人ホセが乗り込んできた。皆、目的地はブダペスト。雨上がりのウイーン西駅を、オリエント急行はゆっくりと発車した。これから、いよいよ共産圏の旅が始まるのである。